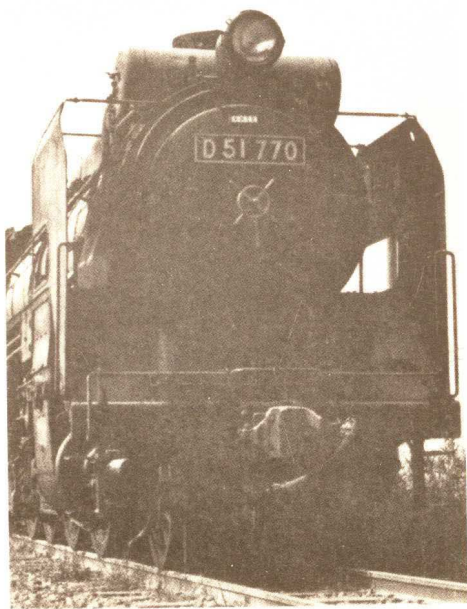


# 続・山脈後記集

笥 槇二 著



山脈文庫

# 続・山脈後記集

一九九〇年八月一日発行

著者

寛楨二

発行者

渡辺真次

印刷所

待望社

東京都板橋区板橋四ノ三六ノ一

発行所

山脈文庫

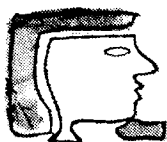
神奈川県横須賀市馬堀町一ノ六八

「山脈」創刊四十周年記念出版（非売品）

© 1990 Shinji KAKEI

続・山脈後記集

笥 槇二 著



山脈文庫

# 目次

|      |                   |    |
|------|-------------------|----|
| 第75号 | '85／昭和60年7月……………  | 30 |
| 第74号 | '84／昭和59年11月…………… | 27 |
| 第73号 | '84／昭和59年5月……………  | 24 |
| 第72号 | '83／昭和58年10月…………… | 21 |
| 第71号 | '83／昭和58年5月……………  | 18 |
| 第70号 | '82／昭和57年12月…………… | 15 |
| 第69号 | '82／昭和57年7月……………  | 12 |
| 第68号 | '81／昭和56年11月…………… | 9  |
| 第67号 | '81／昭和56年5月……………  | 6  |

|           |              |    |
|-----------|--------------|----|
| 第76号      | '85／昭和60年12月 | 33 |
| 第77号      | '86／昭和61年5月  | 36 |
| 第78号      | '86／昭和61年11月 | 39 |
| 第79号      | '87／昭和62年4月  | 42 |
| 第80号      | '87／昭和62年9月  | 45 |
| 第81号      | '88／昭和63年2月  | 48 |
| 第82号      | '88／昭和63年6月  | 51 |
| 第83号      | '88／昭和63年10月 | 54 |
| 第84号      | '89／平成元年2月   | 57 |
| 第85号      | '89／平成元年6月   | 60 |
| 第86号      | '89／平成元年11月  | 63 |
| あとがきのあとがき |              | 66 |



続・山脈後記集

至 自

第 第  
86 67  
号 号

’89 ’81  
／ 昭  
平 和  
成 56  
元 年  
年 5  
11 月  
月

▽法相が元特高と知りし宵老いの寢屋打つ風に苦しむ 北村富貴子

この歌は、「文芸東北」一、二月合併号の巻頭言「ペンを折ってはならない」に引用されてゐた歌である。

昨年の衆参両院選挙によって圧倒的多数を獲得した自民党が、本性剥き出しといった恰好で憲法改悪のキャンペーンをはってゐる。自衛隊に軍隊としての面目を与へ、軍事費を安上がり  
に補強するために必須な徴兵制を復活させるためである。奥野法相と竹田統幕議長がそのお先  
棒をかついだ。彼らは時計の針を逆回転させるための捨石のつもりで本気なのにながひない。

「文芸東北」の巻頭言執筆者のG氏は、冒頭の歌に関する問ひあはせに対し、折り返して丁重  
なご返事をくださった。それによると、北村富貴子氏の歌は、昭和五十五年十月二十六日付朝  
日新聞の「朝日歌壇」入選歌で、近藤芳美選、といふことである。元特高の法相なる人物が、  
はたして奥野氏をさすものかどうか定かではないが、「奥野法相は特高であったことを隠してい  
るようですが、そうだったのではないでしょうか」とG氏の文面にはあった。北村富貴子氏は  
横浜の人だといふ。

問題は、奥野法相が元特高かどうかではなく、そのやうなキナ臭い経歴の持主が、閣僚の、

しかも法務大臣の椅子に坐ることのできる自民党の体質であり、さういふ政党に圧倒的支持をあたへる日本人の体質である。

「五年十年の後、反動的分子が天皇を担ぎ上げて、再挙を計ることも決して絶無なりとは断じ難い」

これは、G氏の引用した高野岩三郎「囚はれたる民衆」―雑誌「新生」昭和二十一年二月号―からの一節だが、「その後『十年』を待たずして、天皇元首化の憲法『改正』論の抬頭を見て今日に至っている」と、前述の巻頭言中にG氏は指摘してゐる。

鈴木首相はジャーナリズムからもその調整能力を買はれてゐるやうだが、調整能力はあつても抑止能力はない、いはば中継ぎ内閣であるらしい。ロッキード事件のメドが立つところに、ていよく鈴木をしりぞけて登場する次の奴が何かをやるのではないか。願はくはこれが単なる勘ぐりに終らんことを、そしてそのとき国民の抑止力が決して喪はれてゐないことを。

▽話は変わるが、昨年十二月、厚生省が「へつんぼ」へおしなど身体障害者に関する言葉を法律から除外する方針を打ち出してから、総理府から全国の自治体にまで飛び火して、新聞、放送などのマスコミも「言ひ換へ集」をつくつたりしてゐるらしい。不快用語、差別語追放、なのさうだ。

「めくら」を「盲人」、「産婆」を「助産婦」、「老婆」を「老女」と、言ひ換への用例をひろつて

行くと、どこかで何かがちがつてゐるのではないか、と思ふ。「氣違ひ」を「クレージ」とする（報道関係の言いかえ集―朝日新聞・二月二十四日）となると、これはもう噴飯物だ。そこには「女中さん」を「お手伝ひさん」にしたのと同じ思想の貧困がないか。「便所」が「手洗ひ」「W・C」「トイレット」「化粧室」と變つて行つた歴史を見るがいい。どう言ひ換へたところで臭気はすぐ言葉にまつはりつく。罪は言葉にあるのではない、使ふ側の人間にある。

▽今井信二、すみさちこの両君が参加した。よろしく。

▽同人の著書のために、山田今次、中村隆、中上哲夫、斉藤正敏の諸氏にご寄稿を仰いだ。ありがたうございました。

▽印刷費と郵送費の値上がりで、戦線を縮小せざるを得なくなり、発行部数を今号から二百減らして八百部にした。したがって、発送先も二百減らす作業をしなければならなかった。これはなかなか難事だった。弱者負担増で、賃金・年金の抑制や福祉切り捨てを踏み台に、気やすく行革や合理化を口にする財界人や政治家はいい気なものだ。

まづ大新聞、商業雑誌など、屑籠直行型の無駄玉と思はれるところから消して行った。保管確実な図書館、交換確実な同人雑誌は残した。

困ったのは個人宛の贈呈分である。発行のたびにきちんと礼状をくださる方、またさういふ儀礼はなくても顔見知りの方々は読んでくださってゐるだらうと、これは残す。困るのは面識も文通もない比較的有名人である。

勿論、同人雑誌を送りつけられて迷惑顔をしたり公害扱ひしさうな人たちには送ってゐないつもりだし、読んでもらひたい人に限定して送ってきたつもりなのだが、誰が読んでゐて誰が封も切らずに屑屋まはしにしてゐるか、これは判断のかぎりではない。全く未知の有名人でも、読んでくれていることを人づてに聞いた例も二、三あるのだ。情報や勘をあてにぶった切りをやって行くわけだが、ものごとを事務的に処理するといふことは、文学をやる人間には元來得

手ではないのだらうと思った。

▽その作業をするために住所録をめくりながら考へさせられたのは、住居表示によってその人の住んでゐる街の顔が見えてくることである。都会型は例外なく一桁または二桁の数字がハイフンでつながられて三つある。これが四つになって最後の数字が三桁になってゐれば、おさだまりのマンション族といふことになる。そして、この数字三つないし四つのハイフンつながりの都会型で、なんとも味気ない町名がいかに多いことか。新開発、新興の町名にへー台へーが丘の多すぎることはすでに定説になってゐるが、へ横須賀市ハイランドなどといふデイズニーまがひのキザな町名にぶつかると、名づけた連中の知能指数までが見えてくる。

その点、へ寺町通今出川下ルへとかへ烏丸上ルなどといふ京都の表示は好きだ。へ南十四条西十六丁目へと番地なしの札幌も、いかにも区画整然といった感じがいい。

町名の次に丁目なしで数字三桁以上だと、これは都会型ではなく空氣のうまいところに住んでゐるな、と思ふ。数字全くなしで郵便物の届く人たち、たとへば竜野咲人さんへ小諸市石峠へ、戸田正敏さんへ新潟県南魚沼郡六日町美佐島へ、岡崎澄衛さんへ島根県益田市戸田へなど、みなさんいいところに住んでゐらっしゃるのだらうと思ふ。

▽古い町名を守らうといふ運動をやつてゐる人たちの話をきいた。井上ひさし氏もその一人らしい。いいことだ。小役人にまかせておけば、いまにへハイランドへ式の没個性が日本中の地

名に氾濫するだらう。それでもなくても片仮名ばかりのマンション名やデパートの商品名に都会人は不感症になつてゐるのだ。

▽目下キャンペーン中の年賀葉書の不買運動は、葉書の倍額値上げに抗議して、郵政省の予算計画に打撃をあたへようといふ運動である。この際年賀状を自粛して出さないといふことも結構だし、年賀状は年に一度の音信だからといふ方も、通常葉書または私製葉書をおつかひくださいますやうに。

▽同人の著書のために、山本丞、右原彪、宮林太郎の諸氏にご執筆をいただいた。ありがたうございました。

▽昨年やった年賀葉書の不買運動は、見事に一敗地にまみれた。ご協力を約束してくださった方はたくさんをられたし、当局側も買ひ控へを警戒して印刷枚数を減らしたのださうだが、業者の大量買ひ占めといふ伏兵にであつて、あっさり増刷されてしまった。

しかも、こちらの運動をご存じの方々は、年賀状は遠慮してくださいとたたくて有難かったのだが、それでも五百七十八通の年賀状の束がどっと到来した。さて返事はどうしたものかと迷ひに迷つたが、元日と二日は来客や親戚の者と吞んでしまつて駄目、三日から六日までではスキーに出かけてしまつて駄目、といふわけで、結局、吞む合間に投函した数通以外は殆ど欠礼、といふ始末になった。

年賀葉書の不買運動もいけれど、年始の挨拶を欠礼することは、忸怩たるうしろめたさと相当鉄面皮な勇氣を必要とするものだと思つた。

そこで新提案。来年の正月用には、やはり年賀葉書を買ふのはやめて、広告付き葉書で代用しませんか。表の下半分にスポンサーの広告を刷り込んだ葉書は、額面は四十円でも売価は三十五円、一枚につき五円の節約になる。百枚なら五百円、千枚なら五千円助かる勘定だ。いまのうちから心づもりをして、広告葉書の出るたびに百枚ぐらゐづつ買ひ溜めしておけばよいの

である。如何。

▽「山脈」は書評をだいいじにしてゐる雑誌だといふお葉書を二、三いただいた。有難かった。  
〈書架〉の欄はたった三冊しか取り上げられないスペースなのだが、対象とする本にはかなり気をつかつてゐる。有名、無名にかかはらず、寄贈されたり本屋で買ったりしたものの中から、算があらかじめよりわけておき、編集委員六名の編集会議の席で三冊を選び、執筆者をきめてゐる。その際、個人的に親しいといふ人脈関係とか、自選他選の売り込みとかは、いっさい右顧左眊しないことにしてゐる。ちなみに、今号の〈書架〉欄の三冊は、次の十五冊の中から選ばれた。

伊藤桂一詩集『黄砂の刻』／土橋治重詩集『甲陽軍艦』／笹島綾子詩集『試合順延』／中正敏詩集『ザウルスの車』／中正敏書簡集『X社への手紙』／花木正和エッセイ集『戦争と詩人―夭折の宮野尾文平』／樫村高詩集『浦・はおづえの女』／一色真理詩集『夢の燃えがら』／小寺雄造詩集『稲羽・たちかわ村』／江川英親詩集『狼の嘘』／尾崎曉一詩集『森の中から』／磯村英樹詩集『続・おんなひと』／木村信子詩集『わたしというまつり』／豊田一郎小説集『洪水に浮かぶ一粒の麦』／木島始訳詩集『異邦のふるさと』

▽キナ臭い世の中になって、南米沖でイギリスとアルゼンチンが喧嘩をやつてゐる。この号の出るときにはどうなつてゐるのだらう。問題は、漁父の利を狙ふソ連がアルゼンチンを第二の

キューバとしたときに、世界はどう反応するのかといふことだ。アメリカも日本も、指導者の質が落ち過ぎてゐるし、ソ連もブレジネフがヨボヨボしてきたらしい。あまりにも時機が悪過ぎる。

欧米の反核運動の盛りあがりは、そのやうな危機感を見通してのものだらうが、日本でも文学者の反核声明と署名を契機に、いろいろな分野で反核、反戦の火の手があがりはじめた。ところが日本とは妙な国だ。同じ文学者の中でイチャモンをつける手合ひがあるらしい。それは結果的には利敵行為になるのではないか。敵を間違へてはいけない。

▽同人の著書のために、南川周三、黒田達也の両氏にご執筆をいただいた。ありがたうございました。

▽佐藤廣延の他界によるショックは暫くつづいた。毎日酒を呑んでも快い酔ひにはならなかった。十月二十三日、すみさちこの詩集の出版記念会で呑んでもまだ浮かぬ顔で帰ってきた。十月二十九日、禿慶子の横浜詩人会賞授賞式とパーティーで、二次会三次会とへべれけに呑んできて、翌日からやっとうやらの机に向かふ気分になった。十月十五日に彼が死んでから、二週間、全く無為の日々だったことになる。

彼の死が、予測されぬ不意の出来事だったわけではない。七月に再入院したときには、予測にともなふ覚悟は、したたかに突きつけられてゐたはずだった。例年の八月の旅は、一泊によるつきあひ以外はいっさい計画さへたてなかった。深夜に電話が鳴れば、さてはと身構へた。

十五日の夜、つとめ先の同僚二十名ばかりと呑んでゐた横須賀の酒場に計報は届いた。駄目だったか、やはり……。呑むピッチが早くなり、酔ひ方が異常になって行くのが自分でも判った。二次会を断って早目に帰宅したつもりなのだが、奥さんとかはしてゐる電話が支離滅裂になった。奥さんと「山脈」関係への電話連絡は総て家内がやった。

彼は私より二歳年下になる。仲間うちでも身近すぎるのだ。しかも、順序よく年齢順に死んでくれるのとはわけがちがふ。酒席の冗談でたがひに葬儀委員長を指名しあったときには、彼